

聞こえに不安のあるお子さんを育てる保護者の皆様へ

1 はじめに

家族に聞こえに不安のあるお子さんがいらっしゃる皆様は、日々の生活や育児の中で、悩み事や困りごとを抱えているかと思います。

このリーフレットは、保護者の皆様に、「先輩である保護者の体験談」や「困ったときの相談先」を知っていただくことにより、今後の子育てを行う上での参考にしていただきたいと思います。

2 保護者の方の子育て体験談

体験談①

私には子どもが二人おります。二人とも耳が聞こえません。上の子は高校生、下の子は小学生です。聞こえない子どもの子育てについてどのようなものか私の経験をお伝えしたいと思います。

～子どもが聞こえないとわかったとき～

上の子は市の1歳半健診時にきこえについて心配があることを小児科の医師に相談したところ、精密検査を受けるように勧められ、大学病院で検査を受けたところ「重度難聴」と判明しました。告知を受けたときはショックが大きくその後の医師の説明等はあまり覚えていませんし、自分の子どもがきこえないということが受け入れられずに数日間泣きながら過ごしたと記憶しています。

下の子は生後すぐに出生した病院で検査を受け、上の子と同様「重度難聴」と判明しました。告知は二度目ということもありショックは少なかったです。早期にわかったことで落ち着いて下の子と関わることができました。

告知の際に私たちは医師から「子どもがきこえないことが残念なことだ」と言われました。これはきこえる人の側からみた考えであり、障害に対するマイナスイメージを植え付けるように感じました。その後ろうの方から言われたのは「生まれた時から音を聞いたことがないからきこえなくて残念と感じたことはない」ということです。私も二人の子どもがきこえなくても残念と覚ることはありせん。

～手話で育てたい～

上の子は告知後すぐに人工内耳の装用を強く勧められました。「この方法以外ない」というような説明と手術をするということが受け入れられず、本当に人工内耳を装用するのが子どもにとって良いことなのか夫婦で考え情報を集めました。成功例も失敗例もたくさんありました。その中で手話で子育てをしている例があり、無理に音を聞かせてきこえる人に近づけるのではなく、きこえないありのままを受け

入れ、ろう者として育てることが私たちの子どもにとって良いことなのではないか
と思い、手話で育てることを選択しました。きこえる親が手話で子育てをすること
は簡単なことではありませんが、私たちの場合は幸いたくさんのろうの方々にお会
いしてろうについてたくさんのことを教えていただいたり、子どもとの関わり方の
見本を示していただいたり、手話を教えていただいたりしながらなんとか今日まで
やってこられたと思っています。きこえる親が手話で子育てをするということが絶
対に無理ということは決してありません。誰にでもできることだと思います。

～子育てをするときに気をつけたこと～

きこえない子どもを育てる場合に特性を知っておくと関わりやすくなります。私も
上の子の子育てを始めた頃は特性がわからなかったので、親子共にストレスを抱える
ことになりました。下の子を育てる頃には特性を知っていたので早くから良い関係を
築くことができました。乳幼児期に気をつけたことは、

- ・目と目をしっかりと合わせてコミュニケーションをとる
- ・周りの音がわからないので目で確認させる
- ・後ろから声をかけない。呼ぶときは肩などを優しくトントンとする
- ・表情豊かに話しかける（マスクで口を隠さない）

このように私たちきこえる人のコミュニケーション方法とは異なることがあると
いうことを正しく理解して子育てをすると、きこえない子の子育てが楽になります。
私も正しい知識を身につけてからは子育てがとても楽しくなりました。

～手話で育てて良かったこと～

手話で子育てして良かったことは、

- ・親子間のコミュニケーションがとても丁寧にスムーズにできるようになったこと
- ・手話を使うことによってイメージがたたくさん作ることができるので、言葉の意味が
掴みやすくなる。
- ・わからないことをわからないと聞けるようになる（わかったふりをしなくなる）
- ・自分はきこえなくても大丈夫と自信を持つことができる。

私の子育てはまだまだ途中です。子どもたちが社会に出たあとどうなるかはわかりま
せんが、ろう者としてきこえる人たちと共生していくことを願っています。

体験談②

①乳幼児まで～

旭川市内の産婦人科で生後すぐに新生児スクリーニング検査をしてもらい何度やってもスケールアウトでした。その後3か月位で耳鼻科へ受診しました。

私の場合第一子で産んですぐに耳が聞こえないということを受け入れることが出来ず絶望的でした。心のどこかで「いや、そんな事あるはずが無い」と願っていたのは今でも記憶にあります。

②子供の療育方針とは～

方針は常にかわっていく気がしますが、娘が2歳の終わりに人工内耳の手術を受けました。そして10歳の時娘の意志でもう片耳の人工内耳の手術をしました。私は娘がしたい！！ということにはなるべくサポートし協力したいと思ってます。常に娘にとって一番良い環境を作っていくのがいいと考えています。

③0歳から3歳までの生活

生後4か月で両耳とも補聴器を付けていました。保育園へ通いながら定期的に乳幼児相談として聾学校へ通い先生方にアドバイスをもらっていました。

補聴器や人工内耳を付けることを嫌がり投げたりすることもしばしばありましたが、なるべくつけてもらうように工夫をしたのを思い出します。

④幼児期の教育は

旭川聾学校の幼稚部に年少さんから年長さんまで通い、その後保育園にも通っていました。この時期は口話とジェスチャーを使いながらのやり取りをしていました。また写真や絵カードなども使っていました。

本人の自発的な発語が増えてきました。発語の時期は子それぞれですがうちの娘は特に年長さんくらいの時にとても増えた気がします。

⑤子供とのコミュニケーションについて

娘とはコミュニケーションは口話中心でしたが、ジェスチャーも取り入れたりしていました。娘が小学部へ入学したころ手話もどんどん使うようになりました。健聴のお子様とかかわる事も多くなり本人は使い分けをしていくようになりました。

我が家の中でも母である私が最近手話講習を受けて習っていますがメインは口話です。娘は習い事もしていますがどれも普通の所へ本人の意志で通っています。娘なりに上手く使い分けをしているようです。

⑥小学校の生活

旭川聾学校へ幼稚部から入学し現在6年生です。バスで通っています。低学年の時バスで人工内耳を同じ年頃の子に何かと聞かれ「耳が聞こえないからこれを付けて聾学校へいっているの」と言ったそうです。

小さいながらも自分の事を自分なりに理解しアウトプットできるんだと驚いたことがあります。現在では1年に2～3回校区内の学校へ交流に行っています。

娘とは何でも話します。学校であったことなどを自分から教えてくれたりするので反抗期はこれからなような気がします。

⑦今後の進路について

まだ定まっていませんが進路の方向については話をしたりします。中学～高校～進学、就職について、まだあまりピンと来ていないようですが、今後やりたいこと、行きたいところへのサポートは本人のやる気と本気次第では最大限にサポートしていきたいと思っています。

3 子育てで困ったときには

聞こえに不安のあるお子さんを育てる保護者の方は、「我が子をどう育てていけばよいのだろうか?」「何かの訓練が必要ではないだろうか?」「周りに相談する相手がいない、孤独で不安」などという不安を抱えていないでしょうか。

聞こえないお子さんやその保護者の方を支援するための機関では、専門の職員が、皆様が子育てを行う上での悩みや不安、疑問を受け止めます。また、聞こえないお子さんを育てる先輩の保護者の方に出会い、情報交換を行うことができます。

【旭川聾学校 乳幼児相談室】(連絡先: 0166-51-6121)

0歳から2歳までの聞こえや言葉の発達に心配のあるお子さんの相談や支援を、医療機関や保健所、特別支援学級等と連携しながら行っています。

また、旭川聾学校には、幼稚部・小学部・中学部が設置されており、聞こえない子の成長を身近に確認することができます。